

## 町工場が持つ強みの連携が 世界と戦う力になる。株式会社 マテリアル



内部はシンプルな構造でありながら、随所に高度な加工技術が施されている。



下町の力を結集して組み立てられたボブスレーの競技ソリ。現在まで13機が製造され、世界レベルの性能が認められている。



国家資格を保有するエンジニアが、さまざまな用途で使用されるアルミの加工から仕上げまでを手がける。

「面倒な話ほど、私はYESから入る」。約4,200の町工場がひしめく東京都大田区で、精密機械加工・マテリアル社を創業した細貝淳一さん(55)は語る。面倒な話は想像もしなかったことに出会うチャンス。だから、どんな人にも会い、どんなところにも行く。10年前、最高時速150キロで滑走する“氷上のF1”といわれるボブスレーの競技ソリ開発プロジェクトに町工場が集結。その中心に彼は立っていた。その時はソリが五輪で滑走する夢は叶わなかったが、「下町ボブスレー」の物語は終わっていなかった。

子供の頃は貧しかった。母子家庭に育ち、3歳の弟を保育園に迎えに行くのは、7歳の細貝さんの日課だった。定時制高校に通いながら材料問屋で働いていた時、素材を加工すれば高額で売れると聞き、付加価値の意味に気がついた。板金工場の片隅を借りて26歳で独立。夫婦ふたりのスタートで、機械や工具を借り、明け方まで溶接のアルバイトをして苦しい時代をしのいだ。「できない」とは決して言わない。大事なことは「1秒先を読む力、未来を予測して行動すること」だと言う。度重なる危機を乗り越え、現在は社員30人。

国家資格を持つ13人のエンジニアが、光ファイバー、ロケット、防衛機器などの最先端の精密部品を加工する。

この街には「図面の紙飛行機」「仲間回し」という言葉が伝わる。図面を飛ばせば翌日には製品となり、技術を結集すれば作れないものはない。当時、「下町ボブスレー」には30社が手を挙げ、図面ができてから、わずか12日で完璧な部品が揃ったという。人と情報がつながれば大きな力になる。町工場が持っている機械や工具を登録してデータベース化し、シェアすることができたら世界と戦える。その鍵は連携にあると、彼は真顔で言う。

現在、さまざまな技術を持つ会社がフォローし合う「仲間回し」を全国に広げている。そして、「下町ボブスレー」は次世代の若い経営者が加わり、2022年の北京五輪を狙っているという。モノづくりの街で世界を舞台にした物語が再始動している。



町工場で連帯を図り、日本のモノづくりを盛り上げる代表取締役の細貝淳一さん

株式会社 マテリアル

〒144-0045 東京都大田区南六郷3-22-11

電話03-3733-3914 ホームページ <https://www.material-web.net/>

三沢明彦(みさわ あきひこ)

1956年生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業後、1979年就売新聞社入社。社会部記者として活躍し、北海道支社編集部長、写真部長、編集局次長を歴任。その後、旅行読売出版社常務取締役編集長、福岡放送常務取締役(報道、制作担当)、静岡第一テレビ常務取締役(編成、報道、制作担当)。